

式 辞

在天の霊、わけても岸本辰雄、鶴澤總明両先生の御霊に、私は本式辞を捧ぐることをもって始めさせて頂く。われらが付属、すなわち明治大学付属明治高等学校・中学校の今にいたる歴史は、卓越した一人の人物の心に灯された理想の光が、自由の精神に溢るる人格に受けつがれ、時代と多くの協力者に支えられ、大樹となり、豊かな実りをもたらしたからである。

本校の創立は明治45（1912）年1月のことである。その前年の44年、明治大学は創立30周年祭を祝し、これを記念し、付属中学の設立を文部省に申請する。明くる年、これが認可された。その設立の趣意書には「男子須要ナル高等普通教育ヲ為ス」とある。

岸本先生が宮城、矢代両先生らと共に明治大学の創立期から、発展のための基礎を何とか据えられた経緯は、人の心をゆすぶる物語りである。それはまさに、財政基盤の薄い創業者らが常に嘗めねばならぬ辛酸であった。大学史は、当時の本学が「いつ廃校になっても」不思議にあらずと記す。しかし、大学開校30年を閲して、その窮状を大学はようやく脱するに及び、付属校設置の申請にこぎつけたのである。

さて、設立許可を承けた大学当局は、45年4月の開校を目ざし、直ちに校舎建設に着手する。工事は急ピッチで進み、もはや足場を外せば竣工となる3月5日、夜間11時頃、これまた新築間もない記念館からの出火が猛火をよび、隣接する付属新校舎を急襲、あわれ全焼に帰するのであった。この時にとられた岸本先生の果敢な行動、そしてその結末を、わが校史は、簡潔に伝える。「当時の大学校長岸本辰雄は病気で療養中であったが押して登校し、昼夜兼行の突貫工事で中学校を再建させ、開校に間に合わせた。しかし岸本はこの無理がたたっ

て4月5日、月島別邸を出て登校の途中、突然たおれて死去した」。享年62歳であった。

われらが明大人のスピリットは、かかる創立者の身を賭した犠牲の上に育成された、と申し上げたい。本校付属も例外ではない。初代校長に鶴澤先生を迎えて、今日にいたる付属発展の礎が築かれる。先生は本学教授にして、理事者でもある。のみならず、衆議院のちには貴族院議員として国政を担い、かつは西園寺、原敬のブレーンを務む。それ以上に、ここでは、弁護士としてのその経歴を強調したい。周知のことながら、幸徳秋水、尾崎弔堂の弁護を手がけ、さらには東京裁判日本側弁護団長として歴史に名を留められた。わざわざこれと言うのも、先生は圧倒的に不利な被告の弁護を敢えて引き受けられ、果敢に戦い、今日の人権擁護の道を整えられたからである。

その人が校長である。副校長には、鶴澤先生同様のクリスチャン、謹直にして学究肌の村田勤教諭が就任される。ここに高邁な理念と自由な精神にあふれた教育が展開されるのである。学校史によれば、校長は常々、付属校を「天下の明治である」と叫ばれた。その意図は、本校はたしかに明治大学直系付属校ではあれ、その殻にとらわれることなく、わが国の中等教育界にあって「第一級の中学校」たらんとする点にあった。

折しも、本校の開校年は、明治から大正へと改元されるその年である。前年には、幸徳事件の発生と、秋水はじめ関係者の処刑、普通選挙法の衆議院通過（貴族院否決）、さらに大正5年に実施されることになる工場法の公布といったごとく、社会改革的運動が顕著となり、それは大正デモクラシーへの幕開けであった。そうした最中、独立人格の実質を備えた男子たるに必須の教育を授け、近代日本の中核的な人物の育成を目指したのであろう。校長の愛する「剛健篤実」が「質実剛健」となり、それが「独立自治」の言葉と結ばれ、爾来、この二つ

の言葉はわが付属校の建学の精神として継承される。付属生徒はこの言葉に支えられ、自らの人生を築くことになるのである。

開校初年の入学試験日は壮観の一語に尽きる。3クラス150名の募集に対し、志願者2千数百人が殺到したという。倍率は優に15倍余である。ちなみに、この当時、東京府に設置されている中学校は府立4校、私立は開成、麻布を含めて28校を数えた。すでに設立後2、30年の時を刻む中学校の多い中、新設校がかような数字を残したのである。それは、わが付属に対する社会の期待と信頼の高さを示すものと言えまいか。

事実、付属はその期待を裏切らなかった。卒業生の進路がそれを証明する。明治への進学者10数名を軸に、東大、早慶各10名程に加えて、京都、東北、九大といった帝国大学他有名私大がそれに続く。この傾向は多少の消長をみせながら、大正期をこえ昭和にまで及ぶのであった。

また、彼らの職業も多様である。法曹分野は勿論、医学他様々な学問領域、教育界、経済・官界やマスコミ等といった具合である。年々の卒業生徒が決して多くはない、中規模の教育機関としては、予期以上の成果ではないか。かくて、鶴澤校長の説く「天下の明治」は、満天下に示されたのである。

ここでの教育は、真に学識に富み、情熱あふる多くの教員に支えられたものである。たとえばチーターの異名をとった松枝体育教諭の場合、今年もたれた没後23年の偲ぶ会には、100有余名に及ぶ卒業生の参加者をみたという。また、独歩や蘆花の名文を詩情豊かに朗詠し、少年の心深く刻みこんで、彼らのその後の人生の糧とした国語教師永松忠雄、「異国の物珍しい小説をさながら眼に見えるよう」に語って、英語への興味をかきたてた野本普一郎教諭の面々である。

だがしかし、わが付属は、ただ勉学を強いただけの学校ではない。これに関しても、触れるべきことは多い。が、ここでは航空部発足のみをあげておこう。

日中戦争の迫る昭和12年3月、当部が設立された。部発会式には貴族院議員、陸軍中将、陸海航空部将校他多数の列席者を見、それぞれの祝辞が述べられた後、三機のグライダーが寄贈される。そのうちの一機はわが国初の国際的プリマドンナ三浦環から贈られ、同機は彼女の名に因み三浦環号と命名されるのである。この一事からも、当時の付属がいかなる社会的地位を占めていたかが明らかである。本校の今にいたる班部活動の多様な発展は、右にみた先端的な課外活動に育てられた伝統によるものである、と教えられるのである。

わが付属の発展は、見るように創立者、教職員、大学一体となった努力のたまものである。しかし、それだけではない。PTA、OB会（総明会）の学校経営に対する深い理解と絶大な支援なくして、本校の今日はなかったであろう。南志賀学寮の建設事業が、そのことを教えている。

昭和45年10月に竣工する当学寮は、グリーンスクールと称されたように、都会の塵埃を離れ、子供たちに大自然から出来るだけ多くを学ばせたいと願う、学校、PTAの熱情に発する。これにOB会も加わり、必要な経費が賄われた。収容定員60名、鉄骨木造二階建て、スキー用具50人分を擁する学寮であった。ここで生徒たちは夏山の清涼を知り、初めて白銀にシュプールを描いたのである。

大きな期待と夢を育んだこの学寮は、だが翌年の夏、ボイラー室からの出火により、一気に灰塵に帰する。思えば本校は、これまで戦災の被害を蒙り、三回の大火に見舞われた。しかし、関係者はそれに屈することはなかった。この度もまた、出火の謝罪と失意に暮れる福島校長を督励し、曲折を経ながらも47年7月、学寮の再建に漕ぎ着ける。誠に、恐るべき情熱と献身と言う他はない。

翻って、現在の付属はどうか。猿楽町から調布に移転し、5年。以来、中学、高校共に男女共学化を実施し、教育の幅と可能性を大きく広げた。志願者は毎

年、中・高いずれも定員の 5 倍程度を維持し、中等教育機関としての評価は高い。わが卒業生の 95%が明治大学各学部に進学するが、そこでの成果も決して悪くはない。卒業時の各学部長奨励賞の受賞者は例年かなりの数に上り、難関をもって鳴る国家 I 種、司法試験、公認会計士の合格者も、毎年、遜色はない。そして現在、本校出身の明治大学教授は准教授を含めて 9 名を数える、と申しそえよう。

こうした現状を踏まえ、わが付属は向こう百年をどう展望していくのか。本日の式典を含めたわれわれの百周年記念事業は、単なる百周年祭の祝い事に留まるものであってはならない。先人のご努力に感謝すると共に、そこから多くを学び、明日を切り開くものでありたい。これこそが、本校を付置する明治大学の要請に答えることであり、同時にまた本校に寄せる社会の付託に忘れることでもあろう。

だが、これらの「要請」、「付託」とは何か。端的に言えば、「個を強く」し、世界に通ずる人格の育成に他ならない。これはまた、明治大学の現下の主要な教育目標の一つでもあることは、今更、多言を要すまい。本校生徒はそうした大学に進学する。否、単に進学するのみにはあらず。大学の中核的な存在としてあらねばならぬ。ならば、それに応じた能力、すなわち語学力に加えて、確固とした教養と精神力、体力を兼ね備えた学生たらねばならないのである。

かかる教育の実現に向けて、本校は現在、様々な施策をとっているが、ここではその二点のみをあげさせて頂こう。その一つは、名づけて「鶴澤總明奨学金プログラム」の創設である。これは PTA、総明会、白駿会に加えて、大学理事、教職員、評議員会、校友及び企業等の多くの方々から、文字通り「明治は一つ」となって、お寄せ頂いた寄金からなる。当基金により、本校は毎年、かなりの生徒たちを、少なくとも向こう 10 年間をかけて、海外に送り出すことが可能に

なった。これに選ばれるためには、生徒は数次の英語コンテストを経なければならぬ。過日行われた最終コンテストでは、彼らは全校生徒 1000 余名の前で、堂々の主張を展開し、大学から来られた 3 名の審査員を唸らせたのである。ここでのパフォーマンスは、これを聴視した多くの生徒たちにも多大なる刺激と勇気を与えたことであろう。「ヨシ、来年は自分も」と。

その第二は、付属版イングリッシュトラックへの試みである。現在、大学各学部は、英語による専門科目の授業コースを設け、そのコースのみで卒業しうる制度を導入しようとしている。であれば、本校生徒もこれに十分耐えうる能力を身につけなければならない。そこで本校は、大学理事会より破格とも言うべきご支援を受け、主要科目を英語で教えられる教師を採用し、魅力あるカリキュラムの策定を目ざしている。向こう 4 年間ほどでその実現をはかりたい。嶮峻な道のりには違いあるまいが、それが達成されるとき、本校は今後、教育界において新たな地平を開くことになるであろう。

今や結びとしよう。再び、在天の諸霊に申し上げる。先生方が心血を注がれた本付属は、百年の歳月をもって、かかる地点にまでたどりえた。今年から向こう百年、わが付属は、鶴澤校長の称えた「天下の明治」が、世界に繋がり、大学共々、世界の人々と連帯し、平和でより良い人類社会に貢献できる人材を一人でも多く輩出しうる、そうした教育機関を目ざして歩み続けて参りたい。微意ながら、我らの決意をここに披歴し、先生方におかれては、わが付属の行末を、なお久しくお見守りあらんことを祈念し、もってわが式辞としたい。

明治大学付属明治高等学校・中学校
校長、博士（経済学） 金子 光男

2012年11月17日(土)